

【鳥取】診療所が消えた地区に光、30代消化器内科医が県の支援受け開業-岡田智之・こおげ駅前クリニック院長に聞く◆Vol.1

鳥取赤十字病院や県立中央病院で研さん、患者から嘆きの声を聞き決意

2025年9月10日 (水)配信 m3.com地域版

「困っている地域に貢献したい」――。鳥取赤十字病院や鳥取県立中央病院に勤務してきた医師の岡田智之氏が2025年7月31日、こんな思いを胸に「こおげ駅前クリニック」（鳥取県八頭町）を開院した。県内の中山間地域では医師不足が問題となっており、同町郡家地区でも近年、2つの診療所が閉院。患者から嘆きの声を聞いた岡田氏は県と町の補助を受け、クリニックを立ち上げた。以前から地域医療に関心があったという岡田氏に半生を聞いた。（2025年8月19日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)



岡田智之氏（クリニックホームページから引用）

高校の入院時、主治医から励まされ医師を目指す

――岡田先生は新潟県に生まれ、2013年に鳥取大学医学部を卒業しました。まずは、医師を志した理由をお聞かせください。

父が新潟県で勤務医を務めていたため、子どもの頃からぼんやりと医師への興味はありました。実際に目指そうと思ったのは、自分が患者として、ある医師から温かい言葉をかけられたことがきっかけです。

高校3年の頃、発熱などに伴う体調不良によって病院を受診したところ、肝機能の数値が高かったことなどにより、入院することとなりました。原因が不明だったこともあり、私はとても不安になりました。「自分は本当に治るのか」「どんどん悪くならないか」――。しかし、主治医の先生は穏やかに、「きっと良くなるから大丈夫ですよ」と励ましてくれました。ネガティブな想像が頭を駆け巡っていた私にとって先生の言葉は大きく、霧が晴れたようでした。先生は考えられる原因もきちんと説明してくれました。体調は徐々に良くなっていき、結果的に1週間ほどで退院することができました。

――ホームページによると、岡田先生は日本消化器病学会と日本消化器内視鏡学会の専門医を保有しています。なぜ、消化器内科を専門にしたのですか。

大学を卒業した時は内科系に進もうと考えていました。「内科か外科か」と言われたら内科だろうといった感じで、具体的な診療科は決めていませんでした。そんな中、初期研修時に回った消化器内科で、「これはすごい」と感動したんです。内視鏡で出血を止めたりがんを切除したりする様子をリアルタイムで見ることができ、自分の技術で病気を治せることに強く興味を覚えました。当時は既に早期胃がんを内視鏡で切除する手技が確立されており、検査によるがんの早期発見だけでなく、その場で早期治療も行えることに魅力を感じました。

研修で地域医療に興味「将来はかかりつけ医に」

——こおげ駅前クリニックの開院を知らせる報道によると、先生は以前から地域医療に関心を持っていたそうですね。

地域医療への関心の芽生えは、初期研修で行った地域医療研修にあります。私は岡山県の津山中央病院で初期研修を行い、同県北部にある診療所で地域医療研修を行いました。そこでは総合病院とは違い、複数の疾患を抱えた高齢患者さんが多くいました。必然的に医師は全身を診る必要があり、患者さんのご自宅や高齢者施設で診療する在宅医療も行っていました。

在宅の現場は印象的でしたね。病院とは違って家や施設では医療資源が限られるため、それぞれの環境をうまく利用して先生は医療を行っていました。例えば、定期的に点滴を受けている患者さんの場合、家の中には点滴スタンドがなかったので、フックのようなものを使って鴨居などに吊り下げていました。

患者さんやご家族との距離感が近いことも在宅の特長だと感じました。「友人」とは言い過ぎかもしれませんが、それに近いような関係性を先生が患者さんやご家族と築いており、まさに「チーム」といった雰囲気です。総合病院にはさまざまな診療科があり専門家が揃っているので、ちょっとしたこと、例えば水虫などでも皮膚科を紹介することがあります。その一方、地方の診療所や在宅の場合では「この病気の可能性が高いからこの薬を塗ってみましょう。良くならないようなら専門の先生をご紹介しますね」といった具合に、患者さんやご家族に寄り添っていく姿勢で診療されていたことを覚えています。

——その後、どのような経緯で開業を考えるようになったのでしょうか。

地域医療研修が終わり、総合病院である鳥取赤十字病院や鳥取県立中央病院に勤務していた時も、折に触れて地域医療を考える機会がありました。急性期医療を終えた患者さんの診療を診療所や在宅クリニックに依頼する場合、病院の勤務医はその地域の医療状況を理解しておく必要があります。「この地域ではこの医療ができる、できない」「こんなことは頼める、頼めない」といったことを考えながら紹介先を勘案していきます。

その中で、「将来的に自分は専門性を突き詰めていくより、患者さんやご家族のかかりつけ医のような形でやっていきたいな」と思うようになっていきました。

——「地域のかかりつけ医」を想像する中で、八頭町での開業が浮かんだと。

そうですね。鳥取市の東に接する八頭町には、診療所はあるものの病院はないため、町から鳥取市の医療機関に足を運ばれる方が少なくありません。私が2020年から勤務していた鳥取市の県立中央病院にも八頭町の患者さんが来院していました。その中で、町の郡家（こおげ）地区にある診療所が2院、院長の高齢化などにより相次いで閉院したことを患者さんから聞きました。患者さんの言葉からは身近に相談できる場所がなくなってしまった焦燥感も伝わってきました。「もしかしたら、自分の力が生かせるかもしれない」と、八頭町での開業を考えるようになったのです。

◆岡田 智之（おかだ・ともゆき）氏

2013年鳥取大学医学部卒。津山中央病院での初期研修後、鳥取赤十字病院や鳥取大学医学部附属病院第二内科、鳥取県立中央病院に勤務。2025年7月、「こおげ駅前クリニック」を開院。日本消化器病学会専門医、日本消化器内視鏡学会専門医。

